

# けんせつ小町

東京大学 特任教授・建築学  
松村 秀一  
Shuichi Matsumura

## キング夫人 世紀の一戦

東京オリンピック・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗前会長の発言が問題になった時、私の頭に浮かんだのは往年のテニス・チャンピオン、ビリー・ジーン・キング（キング夫人）のある試合だった。

一九七三年九月の、これまた往年の名プレイヤー、ボビー・リッグスとの一戦である。キング夫人は女性、リッグスは男性である。男性の賞金に比べて女性の賞金が不当に少額であることに強く抗議していたキング夫人に、「そんなこと言うのは俺に勝つてからにしろ」とばかり

にリッグスが挑戦状を叩きつけたのである。少々年をとっていたとはいえ、リッグスはかつてのウィンブルドン・チャンピオン。さすがのキング夫人も歯が立たないだろうと思いきや、キング夫人が三セット連取して圧勝した。以来テニス界における女性の地位は大きく改善されていくことになった。

リッグスとの試合を含むキング夫人の活動は、当時「ウーマン・リブ」と呼ばれた女性解放運動の一つだった。一九六〇年代に始まったその運動は、一九七〇年代には様々な社会領域に広がりを見せていた。

### 私はハンマーを 手にした

この世紀の一戦当時、私は高校の硬式庭球部にいたが、その後大学の建築学科に進んだ。そして、そこで建築領域でのウーマン・リブを象徴する運動の一端に触れることになった。キング夫人の一戦と同じ年にアメリカで出版されたある本の存在を知ることによってである。「I TOOK A HAMMER IN MY HAND - The Women's Build-It and Fix-It Handbook（私はハンマーを手にしたー女性のためのDIY建築ハンドブック：筆者訳）」（Florence Adams 著）がそれである。

表紙の絵で、オーバーオールを着た自由の女神が、右手でハンマーを高く掲げている。それがすべてを物象することは十分に価値があると思う。

面白いデータがある。OECDは、その『OECD 幸福度白書5』（西村美由紀訳、二〇二二年、明石書店刊）において、三七の加盟国間で幸福度に関する様々なデータを比較しているが、「ネガティブな感情バランスの男女格差」という項目において、他のすべての国で女性は男性よりネガティブな感情を感じる人が多いのに、唯一日本だけが逆なのである。日本の女性のこのポジティブさ（？）には大きな可能性を感じる。

語っていた。それまでアメリカにおいて男性だけが楽しんできた住まいに関するDIYという趣味の分野を、女性にも開放せよという訳である。そして、この本の出版から約半世紀。もはや住まいに関わるDIYを楽しむのが男性だけということはない。それどころか、アメリカばかりではなく日本においてさえも「DIY女子」という言葉に代表されるように、住まいに関わる大工仕事や仕上げ仕事を趣味として楽しむ女性は増え続けているようである。特に在宅時間の増えているコロナ禍の中で、そうした女性が増えたのだとも聞いた。様変わりである。

## DIY女子と けんせつ小町の間

日建連が、女性活躍の場を広げようと、「けんせつ小町」と称して、様々な啓発活動に取り組んでいることはよく承知している。実際、各大学から建設会社に、現場監督を目指して入社する女子学生も珍しくはなくなってきたし、現場でも女

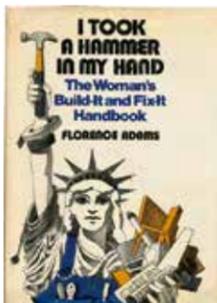
性の技能者の姿を目にするようになった。ただし、まだまだではある。

大学の建築学科等には多くの女子学生がいる。その結果、例えば、二〇二〇年度の建築士製図試験合格者を見ると、一級建築士で女性比率は二八・二％、二級建築士では三八・二％に達している（公益財団法人建築技術教育普及センター調べ）。現場で見かける女性の比率はまだこんなに大きな数字ではない。しかし、先述したようにDIY

1973年に行われた世紀の一戦。キング夫人対ボビー・リッグス。  
この話は2017年に伝記映画化もされている。  
(1973年9月20日撮影、ABC Photo Archives)

女子は大はやりである。つまり、現段階で女性はほとんど現場監督や現場技能者になってはいないが、既存建築再生現場でのDIY工事を実践したり、そのことに関心を持つ女性は多く、また女性建築士も多いため、ここには秘められている。将来の人材の可能性は小さくないと思うのだ。

「趣味と仕事を一緒にされては困る」とか「プロと素人は全然違うのだから」と考える向きもあろう



1973年にWilliam Morrow社より出版された「私はハンマーを手にしたー女性のためのDIY建築ハンドブック（このでの邦訳は筆者による）」